日本人による霊長類の野外研究

—その20年間の回顧と将来への展望—

今西錦司・伊谷純一郎

1

1930年代の後半に、今西は彼の生物社会学を構想するため、~~カーペンターの研究をふくむ、~~外国人によって試みられた霊長類の野外研究の報告を読んだ。その中にカーペンターのホエザルやテナガザルの研究が、含まれていたことはいうまでもない。

終戦後日本に帰えってきた今西は、宮崎県、都井岬の半野生馬の野外研究をはじめた。彼はカーペンターがサンチアゴ島に放飼したアカゲザルの研究からヒントをえて、この研究ではじめて個体識別という方法を導入した。~~野外で生活する群れの内部構造、ならびに群れ集団~~集団を

その当時を回顧して、彼はいっている。

「私には、戦争に負けて、いまさらアメリカの真似ができるか、という気持ちがあった。いや、真似ても勝てる見込みがあるのならよいが、どうせ向こうのやることなら、金にものをいわせるにちがいない。それでは当時として、勝算がなかった。そこで、むこうが金をかけるのなら、こちらは金をかけないでゆく。むこうが短時日でまとまるような問題を選ぶなら、こちらは長年月かけねばまとまらぬような問題をえらぶ、というように、なんでもむこうの裏をゆくことによって、ひとつ彼らの鼻をあかしてやれないものか、と思った。

そう考えてみると、私がかねがねやりたいと思っていた、動物社会の研究は、まさに、こうした条件のすべてを満足しているようにみえる。それなら、なにも迷うことはないのだ。動物社会の研究といっても、私がやろうというのは、文字はおろか言語

というものの言えない動物の社会の中にはいりこんで、観察者がその社会の動きを、動物にかわって徹底的に記録する。そして、こうした記録の集積をまってはじめて明らかとなってくるような、その社会の歴史性の研究である。これはまだ、だれも手をつけたことのない領域であるから、どうしてもわれわれの手によって開拓したいのだが、そのためには、若干の旅費を別にして、双眼鏡とノートと鉛筆さえあれば、充分なのだ。あとはわれわれのファイトでゆける。

　ところで、こうした研究をやろうと思うなら、まずもって、その社会の成員の一匹一匹の顔をおぼえ、その一匹一匹が区別できるようになることが、絶対必要である。われわれはこれを「個体識別」と呼んでいるが、こうして区別できるようになったら、できたものから、符牒か名前かをつけてゆく。こうしておかないことには、その社会において個々の成員のあらわす種々な行動を、正確に記録するということができないからである。」

（「ゴリラ」1960, pp. 38−39）

1948年に、今西・川村・伊谷は都井岬ではじめてサルの群れにでくわし、サルにつられて幸島のサル（Macaca fuscata（ニホンザル））を調べにいった。1951年に、故宮地麻市氏のサゼストにより、幸島のサルにはじめてサツマイモを給餌し、1952年8月に餌づけに成功した。つづいて1953年の2月に高崎山のより大きな群れが餌づけされた。給餌をとおしてサルの群れと人間とが、コンタクトするようになることを、今西はプロヴィジョナイゼーションと名づけた。

伊谷は1950年から高崎山のサルを調査していたが、餌づけによって、個体識別が可能となり、個体識別によって、こんどは群れの内部構造が明らかになった。群れはリーダー、サブリーダー、ナミオス、メスの四つのクラスから構成されている。餌場においては、リーダークラスとメスクラスが中心部を、ナミオスクラスが周辺部を占め、サブリーダークラスは中心部と周辺部の境界付近に位置づけられている。リーダークラス・サブリーダークラスの構成員およびナミオスクラスの上位のそののあいだには、直線的な順位が認め

られる。これらのことはすべて伊谷の高崎山のサルの研究から明らかになり、高崎山のサルの群れが、一つのモデルと認められた一時期があった。

その後幸島の群れの研究によって、小さな群れではメスのあいだにも直線的な順位のあることが確認され、さらにメスのあいだには、一種の家系ともいうべきものがあって、それが順位に影響することもわかった。すなわち、順位の高いメスから生まれたメスの子は、親につぐ高い順位を占めるようになるのである。

河合は依存順位と絶対的順位という考えを呈出した。クラス単位でいえば、絶対順位はリーダー＞サブリーダー＞ナミオス＞メスとなる。しかしメスクラスは中心部にリーダーがいるかぎり、リーダーにつぐ順位を占めて、順位はリーダー＞メス＞サブリーダー＞ナミオスとなる。このときのメスの順位は依存順位であるという。リーダーがおらなくなり、サブリーダーがリーダーに代って中心部を占めるようになると、

こんどはサブリーダー＞メス＞オトナオスという順位になるが、この場合にメスクラスの占める順位も、やはり依存順位である。

その後各地の群れが餌さづけられ、観光対象となると同時に研究対象となったが、その結果、群れによってサルの行動にすこしづつちがいのあることが明らかになった。研究者の方も、京大、大阪市立大の他に、19[illegible]年から新らたに阪大が加わることにより、その陣容を豊富にした。

サルの行動は、そのサルがどの群れのどのクラスに属し、またそのクラスの中でどのような地位を占めているかによって、異なるばかりでなく、群れの一員として行動しているときと、群れをはなれ、ヒトリザルとして行動しているときとでも異なる。サルの野外研究に、個体識別に立脚した社会学的アプローチの必要とされる所以であるとともに、個々のサルの系譜と、その地位の変化を追跡するための長期観察をふまえた歴史的アプローチの重要さ

れる理由が、ここにある。

2

かくして現在までに、国内で研究の対象となった野生ニホンザルの群れは（　　）に及び、長期観察の方も、幸島および高崎山の群れはそれぞれ18年にわたって続けられ、おびただしい資料を集積をみるに至った。われわれはサルの多産する国に生まれたことを感謝すべきであろう。1957年バンコックで汎太平洋学術会議が開かれた際、川村はわれわれの研究成果を発表して、各国の学者を驚かせた。いままでだれも、日本人がこんな研究をしていたことを知らなかったからである。日本の学界もまた半信半疑でわれわれの研究に注目したことであったろう。なんとなれば、大学のちっぽけな実験室に持ちこめる動物の大きさには、おのずから限界があり、哺乳動物を研究の対象にする分野といえば、畜産学や、さそ

なければ、これを実験動物として用いる医学方面にかぎられていたので、野外で大動物の群れを対象とした研究などというものは、いまだ伝統として日本の学会に定着していなかったからである。

それにしても、実験室の研究にはどちらかといえば不向きで、むしろ野外の研究に適した人たちが、期せずして同じ研究室に集まっていたということが、われわれの研究の進展に幸いしたということを、ここに書きつけておかねばならない。

さて、われわれは、ほぼ十年間ニホンザルの研究をつづけたのちに、東南アジア・アフリカ・南米へ、外国産のサルを求めて、出かけることになった。ニホンザルの研究をうち切ったわけではなく、それはそれとして、その後もつづけられているのだけれども、一方では異種間の比較研究という新らしい段階にまで、われわれの研究が成長したことを意味する。そしてそのためには、ニホンザルしかいない日本をはなれて、いきおい外国

に研究の場を求めなければならなかったのである。

かくして南米へは、徳田が19（　）年に1度行ったきりであることをのぞき、東南アジアは1957年に来、川村を中心として調査が今日まで継続的に行われ、とくに日印合同で19　―19　年に行われた、ラングール（学名入れる）の研究には、日本側から川村・杉山・吉場が参加して、見事な成果をおさめた。彼らはこのときラングールに対し、えさづけを行わずに、

人間に馴れさすことだけで、個体識別を成しとげた。これがすなわち、えさづけに対してひとづけ habituation と呼ばれている接近法である。

アフリカは、今西・伊谷により、1958年から類人猿を対象として、研究が開始され、はじめの三年はマウンテンゴリラが研究対象となっていたけれども、四年目から対象がゴリラからチンパンジーに切りかえられて、今日までつづいている。アフリカには類人猿の

みならず、さまざまな種類のサルが棲息しているにもかかわらず、その中でもとくにゴリラやチンパンジーのような類人猿を対象にえらんだのには理由がある。われわれは霊長類に属するさまざまなサルの社会の、比較社会学的研究にとどまらないで、はじめから、社会進化史とくに人類社会の起原の究明に関心をもっていた。そして、原始人類の社会の実態は、現存する狩猟採集生活者の社会と、現存する類人猿の社会の両方から、資料をつきあわせることによって再構成する以外に、科学的な道のないことを知っていたから、前者と文化人類学者の研究にまつこととして、われわれは後者によるアプローチを選んだのである。

　その点で、われわれの類人猿研究が、はじめは日本モンキーセンターの企画として発足していながら、やがて京都大学人文科学研究所の社会人類学部門を窓口とする一時期をへて、現在では理学部の人類学研究室でその研究が

のばされるようになったということには、いろいろな事情が介在したにせよ、けっきょく落ちつくべきところに落ちついたという見方も成りたつのである。

いまでは日本人による霊長類の野外研究といえば、世界中で高く評価されているにちがいないけれども、1957年に今西がバンコックで研究発表をしたときには、並いる学者が虚をつかれたように驚いたということは、さきにのべたとおりである。これとは逆に、

われわれが1958年に、はじめてアフリカでゴリラを研究しようとしたとき、われわれの驚いたことには、すでに2人の、イギリスの、学者がわれわれよりすこしさきにマウンテンゴリラを研究していたことであった。1959年には、アメリカからエムランとシャラーがマウンテンゴリラを調べにやってきた。われわれが対象をゴリラからチンパンジーに切りかえたときにも、イギリスの、グドウはすでにゴンベストリームでチンパンジーを研究していた。またオランダのコルト

ランドはコンゴで、イギリスのレイノルズ夫妻はウガンダで、われわれと相前後して、チンパンジーを観察していた。

ゴリラやチンパンジーだけでなく、霊長類全般にわたって、その野外研究がこの時点で全世界的に火蓋を切りだしたのである。この一致は、偶然であるとしてかたづけてよいものだろうか。実験動物としてのサルの価値が急速に高まってきたこととも関係がないとはいえない。人類とサル類との距離の近さが、いままでよりも切実に感ぜられるようになったということにはたぶんあるであろう。それにしても、われわれは、日本の霊長類学一般の通例のように、欧米でそういった研究が脚光を浴びだしたから、これをいち早く日本へもって輸入したというのではなく、そういうこととは全く無関係に、日本にサルがいたからサルの研究がはじまり、その何年間かの成果をふまえて海外へ乗りだしたところ、たまたまサルのいない国からサルを求めてやってきた研究者たちと、ぶつかることになったというのが、われわれの偽らざる告白なのである。

3

次に言語を調査するためには、対象となる動物がいるというだけではすまない。その動物がそこで適当なサイズの群れをつくっているということも条件だし、そのような群れがいくつか相接して、同じ一つの地域に棲息しているということもまた、必要な条件の一つである。われわれのゴリラ調査は、このような群れさがしに終始したが、一方でシャラーは、カバラというゴリラの宝庫を手に入れたので、その研究を[illegible]すばらしく高めることができた。

研究の初期段階にあたるこの群れさがしには、運不運がある。チンパンジーの場合にも、われわれはこの初期段階で苦労を重ねた。チンパンジーはいるが、密生の集まった場所に、なかなか行き当たらなかったのである。それともう一つは、これはゴリラに対してあれほど（き目のあ）ったささげ[illegible]ず、ほとんど無

われわれは、チンパンジーぐらい進化のすすんだ動物に、このようなアモーファスな社会を考えることができなかった。たまたま伊谷と私は、1965年にフィラバンガで、行進中の43頭からなる大きな群に出会い、これが一つのまとまりをもったチンパンジーの群れであり、したがって一つの社会単位であるにちがいないことを確信していたが、その確信が西田と杉山の研究により、確認されるに至ったのである。初期段階になめた苦労はついに報いられて、われわれはチンパンジー研究上に横たわる一つの閉ざされた扉を、開くことに成功したのである。

伊谷がブレバンドと名付けたこの大きな群れが、チンパンジー社会のsocial unitである。しかし、チンパンジーはこの集団の中で自由に離合集散していて、そこには母子の結びつき以外になんらその他の恒常的なまとまりがないばかりでなく、[illegible]ということで、一[illegible]の[illegible]、しばしば、[illegible]かわるがわる

接触したという。グドウの報告が、伊谷や杉山によって再確認された。ただここで注意すべきは、こうした大きな群れがばらばらに分裂していた場合が多いにもかかわらず、群れ全体としては一定の遊動域をもっていること、そしてまた、こうした大きな群れとある程度まで遊動域を重複させた他の大きな群れがこれと接触しながら生活していて、両者のあいだである程度まで往来が可能であるということである。

このことは、いくつかのこうした大きな群れが近隣関係をとおして結びあわされ、グドウのいう地域社会をつくっているのではないか、ということを示唆する。そしてこの点は、ニホンザルはじめ多くの霊長類にみられるように、たとえ二つの群れが隣接していても、おたがいにその遊動域を守り、たとえ群れおちしたハナレザルをとおして相互間になんらかの交流が行われているにせよ、全体的には排他的な関係のうえになりたった社会と、

いちじるしくちがうところである。いいかえるならば、ニホンザルの群れなどは、それ自身が一つの社会単位であると同時に、内婚による一つの繁殖単位であるとも見なしうるが、チンパンジーの大きな群れは、一つの社会単位ではあっても、それ自身がかならずしも一つの独立した繁殖単位でなく、繁殖単位はむしろ近隣関係で結ばれた、いくつかの群れにまたがる一つの地域社会であるのかもしれない。伊谷が発見したフィラバンガの43頭の群れは、大きいにはちがいないけれども、その中に若オスが見あたらなかったということは、こうした考えを支持するであろう。つまり若オスは単独で地域社会内を彷徨しながら、適当な群れに定着するのだろう、と考えられるからである。

このようにいくつかの群れが、近隣関係をとおして地域社会をつくっているという点では、ゴリラの社会と同様であるが、ただゴリラの群れは大きくなく、せいぜい30頭まで

があり、そのうえ群れには最も巨大なオスがおって、リーダーの位置をたもっているというところが、チンパンジーとちがうのである。ところで、類人猿に数えられてはいるけれども、テナガザルになると、オス1／メス1とその子供という小さな群れが、それぞれ一つの社会単位としてそれぞれのなわばりをまもり、近接した群れと群れとが相対立して近隣関係をもつに至っていないという点では、むしろニホンザルの社会に近い。しかし、基本単位ということになると、この小さな群れでなくて、こうした群れのいくつか集まったものを考えねばならなくなるから、そこにいわば潜在的な地域社会の存在を、考えられないこともない。ゴリラやチンパンジーの社会というのは、そうすればテナガザルの群れが、その縄張りを解消して近隣関係をもつようになり、それによってこの潜在的な地域社会を、顕在化したものと、みなすことができるのではないだろうか。

4

すでにのべたごとく、われわれの類人猿社会の研究は、人類社会の起源に対する関心とかかわりをもって進んできたのである。下山は人類社会が家族を社会単位として構成されている事実に注意し、人間家族の特徴として、1. incest tabuの存在、2. exogamy 3. 地域社会 4. 夫婦間における分業の四つをあげた。

この中で、前三者は相関連している。incest tabuを認めることは、家族内で再生産をつづけることの否定であろう。incest tabuと家族外婚とが両立していなければ、社会は持続されない。外婚をも継続してゆくためには両婚団をこえる程度の大きさをもった地域社会の存在が前提条件となってくる。ワシュバーン・ランカスター*らはこのためには、少なくとも500人くらいを擁する部族社会が必要だと考えている。本格的狩猟採集民の生活単位のつくる一つのバンドが、50人くらいから成立しているとすれば、

* Washburn, S. L. & Lancaster 1968 The evolution of hunting. Perspectives on Human Evolution, edited by S. L. Washburn & P. C. Jay, pp. 213–229.

もまた同じでウォシュバーン＊とランカスターも、ここの起源を狩猟生活との結びつきに求めた。すなわち雄性がもっぱら狩猟に従事するようになったため、いままでの採集狩猟生活が分化して、狩猟は雄性の専掌となり、そこで食物の分配をとおして成りたつ生活の経済的な一体化に、人間家族の特徴を見いだそうというのである。

しかし、バブーンやチンパンジーには、すでに狩猟といっていい現象が認められ、とくにチンパンジーでは狩猟は雄性によって行われているという報告があり、一方では、狩猟採集生活者の生活を調べてみると、肉食依存の程度が案外すくないことなどから、狩猟によってこの分業を説明しようという誘惑を、この辺で一度退けてみることが、必要なのかもしれない。

今西はいまのところ、この分業の起源を、家族の起源とも、また狩猟の起源とも、切りはなして、人類史のうえでは、かなり古い初めの時代までさかのぼったところに、位置づけさせ

＊赤出

るのであろうか、と考えている。彼は分業ということよりも、経済的な一体化ということの方に、ウェイトをおくのであり、さらにこの経済的な一体化ということが、雌性と雄性との対等な、相互的な営みよりといったところからはじまったとみるよりも、むしろ雄性が雌性を助けることによって、経済的な一体化がはじまったものと考える。

　生物の種というものは、もともと単、たれからも世話にならず、またたれの世話もやかない

単独生活能力者を、その個体として成立したものである。（すくなくとも食物の獲得に関するかぎりはこれを自分でまかなうことができるのである。）年老い、あるいは傷ついて単独生活能力を失ったものは、自滅するのみである。ただし、次代をになうべき子供が単独生活能力をもたない場合には、親がこれを扶養しなければならない。そうでなければ、種が存続してゆかないからである。しかし、この扶養のために、親が単独生活能力を失なうようなことがあってはならない。そうなれば、親子が共倒れになってしまうからである。

霊長類の社会をみると、母親が子供をまもり、これに哺乳しているが、そのために母親の単独生活能力が損なわれるようなことがない。だから母親は子供をかかえながら、群れの中にあって、群れとともに行動できるのである。群れとともに行動できるということは、単独生活能力者であっても、単独でいるよりはいろいろな点で生活の安全がより保障されている。

しかるに、人類進化の傾向として、より胎児化のすすんだ子供が生まれるようになり、母親はこの子供をつれたままでは、もはや群れと行動をともにすることができなくなった場合に、群れはこの母親を見棄てるであろうか、というところが問題なのである。この場合に、たとえこの母親は、ひとりになってでもなお自活能力をもっていたとしても、種族保存という立場からいえば、群れにいたときよりは、はるかに危険の多い生活をしなければならない。どうしてもここでボディガードがほしいとこ

ろであるが、それを特定のオスがひきうけたとしよう。やがてこのオスは、単なるボディガードにとどまらないで、狩猟にでたときには、その獲物の一部を持ちかえってメスに与えるようになるであろう。

ここに経済的な一体化の端緒を認めるとしても、これは群れ社会の中に、まず世帯householdが析出してきたのであって、これをまだ家族と呼ぶことはできない。なぜならばベンダー*のいうように、世帯と家族とは同じものではないからである。オスにとっては、子供の扶養に協力することと、種つけのあいだには、はじめは結びつきがなかったのであろう。高崎山のボスザルでも子守りはしているのである。世帯はできても、原初の人類はおそらくincest tabuに結びつくある傾向をのぞけば、種つけに関してはもっと自由にふるまっていたことだろう。あたかもチンパンジーの社会にみられる性行動の自由さのように。

しかし、人類社会にはすでに、チンパンジ

* Bender, D. R. 1967 A refinement of the concept of household: Families, co-residence, and domestic functions. Amer. Anthrop. 69: 493-504

一の社会にみられぬ世帯というものがあった。これがやがては家族に移行するのである。いいかえるならば、今西のあげた人間家族の四つの特徴のうち、第三の地域社会の起原はもっとも古く、ついで第四の分業が世帯の成立とともに先行する。そして最后に第一・第二の incest tabu と exogamy が制度化されたところで家族が成立する、と考えるのである。

いままでは、とかく現代人が現代人の立場から、人間と人間以外の動物とを区別することにもっぱら興味を示してきたけれども、われわれ人類学者の興味は、これからは、動物としての人間が、いつどのようにして、人間らしい人間にかわったのかということに、しぼられてくるであろう。